
妹…ということ

水瀬藍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妹...ということ

【Zコード】

Z7001B

【作者名】

水瀬藍

【あらすじ】

わたしは、お兄ちゃんもお姉ちゃんも大好きだった。

だけど、二人が付き合い始めてから、関係は壊れた。

どうしてあのままじや駄目だったの？ 何も求めてなかつたのに。

どうして裏切つたりしたの？ わかつてくれるつて思ったのに。わたしが知つた答えは、残酷なものだった。もう取り戻すことなんて、できない。

後悔は、してからでは遅いとこつけれど、してみなければ分からぬものだ。

後悔は、してみなければ分からぬといつけれど、してからでは遅いものだ。

結局のところ、どうすればよかつたのかなんて分からなくて、どうしていいのかも分からぬ。ただ、後悔できること、それだけはよかつたと思える。

* * *

ずつと見つめてたひとがいる。
ずつと想つていたひとがいる。

少しずつだけど、きらめく虹色の砂は心の器に積もっていく。そして苦しんで泣いても、涙では溶かすことができない。こんこんと積もり積もって、溢れだすときを待つだけ。

どうしてだろう。人のDNAは、近しいひとを好きにならないようになってるといふけれど、本当なのだろうか。わたしだけがかしいのだろうか。

好きになってしまったひとは、義理の兄ではない。近所のお兄さんでもないし、生き別れのお兄ちゃんでもない。十六年間、おなじ家で育ってきた本当の兄妹。ブラ「ンなんかじゃない。一人の男性として、お兄ちゃんが好きなんだ。

ねえ、どうしてかな。幼稚園でも、小学校でも中学校でも、高校に入つても、わたしを好きになつてくれた人はいたよ。だけどやつぱり、お兄ちゃんと比べちゃうの。

このひとが側にいるとどんな感じかな、とか。このひとも優しく髪を撫でてくれたりするのかな、とか。想像しても、誰もお兄ちゃん

んには敵わないから、わたしはずっと好きでいた。

だつて、そうでしょ。一緒にいて幸せでいられるひとを好きになるのって、自然なことじゃないのかな。

わたしは、何も求めてなんかいなかつた。ただ好きでいただけ。

それだけでも十分に満たされてたし、それ以上は欲張りだとも自覚してた。なのに、そんな小さな幸せさえも続きはしなかつた。

お兄ちゃんに彼女ができたとき、わたしは壊れてしまつた。

心のなかから黒いものが一杯に溢れて、抑えることも出来ないで一気に吹きてきた。嫌いにならないで、見捨てないで、つて。すがりついて、泣きじゃくつて　お兄ちゃんの苦しみなんて考えずに、自分勝手に死のうとした。

ねえ、わかるかな。お兄ちゃんが誰のものでもなかつたから、わたしは好きでいられた。好きでいてよかつたんだよ。お兄ちゃんが、好きの意味を知つたら、わたしは好きでいちゃいけない。

好きにもいろいろあるつていうけど　それつて、嘘だよね。だつて結局、そのひとに見てもらいたいつてことだから。自分を見てほしことだから。

誰か一人を強く想うようになつてしまつたら、他のひとを好きでいるなんて出来ないんだよ。大事にするなんて出来ないんだ。

病院で目が覚めたとき、心配そうに顔を覗き込んでいたのは、大好きなお兄ちゃんだった。ずっと手を握つて、側にいてくれたらしい。

ちくりと胸が痛んだ。なんでお兄ちゃんがそんな顔をするの。もうやめてよ、辛くなるだけだから。心のうちで思つても、言えない。ぬるま湯のような心地よさに、まだ浸つっていたかった。もしかしたら溺れてしまつていたのかもしれない。

お兄ちゃんの彼女は、幼なじみのひとだった。わたしも、お姉ちゃんなど呼んで慕つていたひと。だからこそ許せなかつた、わたしの居場所を奪つたお姉ちゃんを。

ねえ、どうしてかな。わたしだつて分かつてたよ。お兄ちゃんか

ら離れなきやいけないってことは。だけど、わたしが誰かを好きになるまで待つてくれてもよかつたのに。そんな日が来るのか分からなければ。待っていてくれたら

お姉ちゃんにも相談したよね、わたしが好きなひとのこと。笑われるかと思ったけど、柔らかく微笑んで、おかしなことじやないって言つてくれたのに。見守つてくれるつて言つたのに。

一人が付き合い始めて、わたしは少しづつ距離を置くようになつた。大好きなお兄ちゃんと、大嫌いなお姉ちゃんとも。

* * *

それから季節はめぐつて 忘れられない冬。

雪の降る日だった。灰褐色の空を雲間から覗く満月が照らし、優しくすべてを埋めていく、それでいて冷たい粉雪が降り注いでいた。わたしはお兄ちゃんのあとについて、病院に向かっていた。タクシーまで呼んで、家から数キロ離れた医療総合センターへ。お兄ちゃんは何も言わずに表情を硬くして、ただ痛みに堪えるように両手を握り締めていた。

病院に入ると、お兄ちゃんを見とめた看護婦さんが、慌てた様子で急ぐように促した。もう時間がない、と。わけもわからず、わたしは案内されるまま廊下を走つて。そして

「お、ねえ……ちゃん？」

病室の扉が開かれた途端に、わたしは立ち尽くし呆然と言葉をこぼした。急に苦いものが込み上げてくる。理解してしまつた、一瞬で。

理由を聞いた後ろを振り向くと、お兄ちゃんは辛そうに口を開いた。

「最後に……お前と二人きりで話したいって……あいつが」

「お兄ちゃん、は？」

「俺は、もう……いいんだ」

片手で顔を覆つて表情を隠すと、お兄ちゃんは肩を震わせはじめた。きっと、お別れを済ませていたのだな。

「……行ってやつてくれ」

お兄ちゃんが言つよつはやく、わたしはようようと歩を出していく。

不思議に幻想的な空間。病室一面の真白だけでなく、窓の外ですらも純白に染められて、調べられた舞台にお姉ちゃんは眠つていた。

「お姉ちゃん」

声を掛けられれば目覚める程度に、眠らされていたのだろう。わたしが呼ぶ声に、お姉ちゃんは反応してくれた。

「きて、くれたんだね」

たつた一言ですら、苦しげに言葉を紡いでいる。それでも、鎮痛剤が効いているのか、会話は出来るようだつた。

「なんで……なん、で？」

「ごめん、ね」

流すまいと堪えた涙が、堰を切つて溢れ出した。

「……なんでつ！？　わたし、こんな認めない！　するこもん、お姉ちゃんは、するいよー！」

「ごめんね……」

わたしのなかの後悔の気持ちが、お姉ちゃんを責める言葉としうつけられる。謝りたいのに、こんなときまで素直になれない自分がいる。謝るべきはわたしで、責められるべきもわたしなのに。

お姉ちゃんは微笑みさえ浮かべて、わたしを見つめていた。一人だけで向き合つて話すのは一年もまえに遡る。仲のよかつたあの頃が鮮やかに蘇つて 大事なことを確認した。

悔しかつた。恨みもした。でも、いなくなつてしまえばいいなんて、これっぽっちも思つたことない。もう大丈夫。わたしは謝ることができる。お姉ちゃんが、大好きだから。

「……ごめん、なさい」

「謝つてるのは、私だよ？」

「違へ、の。」「ぬ……」「ぬんなさこつ」

「……」

「何も知らなくて…… 何も知らないのこつー」

「……」

「やだ……お姉ちゃんが死んじゃうなんて、やだよお！」

駄々をこねる子供のように、わたしはお姉ちゃんにすがりついて泣き叫んだ。大きすぎる哀しみが行き場を失つて、混乱していた。そんなわたしを宥めて、お姉ちゃんはいつもと変わらない口調で最後の願いを唱えた。

「ねえ、私の知らない一年間のこと。お話してほしいな」花のようになれる笑顔に支えられて、わたしは精一杯はしゃぎながら話すことができた。

お姉ちゃんのお菓子が食べられなくなつて、料理に挑戦をしたこと。

お姉ちゃんの補習がなくなつて、自主勉強が少しだけ増えたこと。お姉ちゃんと遊べなくなつてから、友達づきあいを考え直したこと。
いま思えば、環境が変わつたのはお姉ちゃんがいないせいで。だから新しいHPソースには、お姉ちゃんの思い出が絡んでくる。そんなことにも気づかされた。

そして一年間を振り返つて、お話には終わりが訪れる。いつのまにか薄田になつていたお姉ちゃんは、時計も見ていないのに言った。「あれ、もう二んな時間。帰つたほうがいいよ、お兄ちゃんが心配するでしょ？」

懐かしい台詞に、一瞬その意味を掴み損ねて 理解したとき、

今度こそは泣くのを堪えた。

「……うん。それじゃあ、また、ね」

同じように懐かしい台詞を返して、ふたたび後悔した。分かつているのに。お姉ちゃんとは、もつ会えないのだと。それでも、やっぱりお姉ちゃんは微笑んでいた。だから黙つて背をむけて、扉に向

かう。

「またね……今日は、ありがとう」「わたしは振り返らなかつた。

* * *

「なんで、教えてくれなかつたの？」

「だつてなあ。ふつう言わないだる、そういうこと」と
桜の咲き始めた四月上旬。わたしとお兄ちゃんは、お姉ちゃんの
家にいた。身辺整理というやつだ。大体はお姉ちゃんが自分でやつ
ていたのだけど、さすがに全部は無理だから。体力的にも精神的に
も。

お姉ちゃんは幼いころに両親を亡くして、ずっと一人だつたらし
い。親戚から金銭面での援助は受けっていたものの、施設を出てから
は養子の申し出を拒んで実家に居つくなつたのだと。どう
してなのか、理由は分からぬけれど。小学校から一緒だといふの
に、まるで気づかなかつたのも馬鹿みたいな話だ。

「じゃあ、お兄ちゃんは一階からお願ひね。わたしは一階からやる
から」

「わかつた……あんまり漁るなよ?」

「そんなことしないつて!」

言いつつも、お姉ちゃんの部屋を整理するのは楽しみだつたりね。
階段を上りながら、この家の主に想いを馳せる。結局あの夜に話
したのは、他愛もない近況報告だけだつた。お姉ちゃんがわたしを
許したでも、わたしがお姉ちゃんを許したでもなく、ただ一年前の
ようにお話をしただけ。

だけど、十分にお互いを分かり合えたというのは、自惚れなのか
な。聞けなかつた想いを聞きたい。答えが知りたい。まだ迷いがあ
るのは、いまのわたしがお姉ちゃんを無視できないから。

「え、これ……」

綺麗に整頓されたお姉ちゃんの部屋。扉を開けて、すぐに田にはいる勉強机。その上に、一冊のノートが置かれていた。それは日記だつた。

いまいじで読みふけるのは躊躇われて、手に取ったノートのページをぱらぱらとめぐり飛ばしていく。たどり着いた最後のページに、わたし宛の文章があつた。

『死にゆく私は、幸いだろうか

しあわせな思い出だけを抱いて逝けるのだから

生きてゆく貴女は、辛いだろうか

かなわぬ想いを抱いて行かなければならぬのだから』

「……」

わたしがお兄ちゃんを好きでいることを、許してくれていた。それが分かつた。相談したときの、見守ってくれるという言葉は嘘じやない。ちゃんと形に残されてる。

ただ、お姉ちゃんもお兄ちゃんが好きだつただけ。お兄ちゃんがお姉ちゃんを好きになつただけ。一緒にいて幸せなひとを好きになるのは、自然なこと。結局、それだけのことだつたんだ。

ねえ、聞こえてるかな。わたしはお兄ちゃんを好きでいるよ。ずっと、ずっと。叶わないけど、苦しむだろうけど。でも、お姉ちゃんの想いも確かにわたしのなかにあるから。

それに約束したもんね。またね、つて。今度お姉ちゃんと会いつとき、お兄ちゃんが他のひとと付き合つたら可哀想だし。見張つてあげるよ、変な虫がつかないよ。』

だけど、もしわたしが認められるようなひとだつたら。そうしたら、お兄ちゃんを任せてもいいよね。それまでは、わたしが側にいるから。

「お姉ちゃん……」『めんね。ありがとう』

残してくれた大切な日記を、大事に胸に抱えて、わたしは泣いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7001b/>

妹...ということ

2010年10月11日22時33分発行